

從軍看護婦の記録

医療文芸集団編

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

白の墓碑銘

編者略歴

1963年発足。翌年4月から
季刊雑誌「医療文芸」を発行。
会員1000人。
編書「白の青春」(東邦出版社刊)
新宿区四谷4の10全医労会館内

白の墓碑銘

¥ 480

昭和43年6月30日発行

著者 医療文芸集団

発行者 藤山真人

発行所

東京都千代田区神保町1-3

TEL (294) 0418番

振替 東京85275番

株式会社 東邦出版社

落丁乱丁はおとりかえいたします。

東邦出版社

△前書にかえて▽

二人の母親（遺族）から編者への手紙

〔竜古ますさんから〕

前略 二十余年も過ぎました今日此の頃、誰が思い出してくださることか、日々にうとく忘れ去られんとする折から、思いがけないお手紙ただ嬉しく涙にくれました。あの子の便りは、「ラバウルではげしい空襲にあい、マラリヤにも罹り、赤道を船によいながら通り、ようよう比島についてほっとしたこと、もし生きて帰る日があったら、ここ、やしの木陰の涼しさ、生きることを忘れて傷病の方がたにつくした思い出をお母さんに語りたい」と、それが最後でございました。私がそれを見てはかなしむものですから、家の者が墓の中へ入れてしまいました。

思えば辛苦のあげく、母の作った下着をはだみ離さず死ぬまでまとい、人びとの行けぬミンダナオのジャングルの中をさまよい、ついに歩けなくなって瞑目いたしましたよし。雨のあした、嵐の夕べには、その方向らしい西南に向かって、いとしい娘のなきがらは、今はどうなっているであろうかと涙するのでございます。

どうか仰せの従軍看護婦のほんとうの姿を、永遠の平和のためにお伝えくださいますようお願い申し上げます。

年を取りまして、文中お見苦しい所もございましょうが、お許しくださいませ。

竜古ます（七十五才）

〔山野たいさんから〕

四月十九日出のお手紙ありがとうございます。実のところ、私はあてにしていなかったのです。私の氣持をどこにうったえても、取り上げてもらえなかったのです。

その当時は、兵隊さんでなければ看護婦でと、軍部はなやかな時でしたので、山野家には女の子三人でしたから、清子は、どうしても口赤に行きたいと申して入社致しました。

親の口からほめるのは親ばかと思われるかも知れませんが、私にはすぎた子でした。入社試験の時も、付添いなどいらないと、一人で行きました。その時の話では、一千人以上も来ていたとのことでした。その時、目の見えなくなった人や、足が不自由になり看護婦さんに手を引かれてゐるのを見て、清子は氣の毒になり、「人なみ以上に五体りっぱなからだを、戦争のためにこなにされた。戦争に行けない私は、この人たちのために、手となり足となる決心をいよいよかたくした」と、入社試験の作文に書いてきたと申していました。

本人も私たちもかくこの上とはいえ、戦死……、これには涙がかれはてるほど泣きました。戦いに勝ってこそお国のためですが、今日となつては、涙よりほかありません。

なれが後　今追がたし　さりながら　十年二十年　其後我も追い行かん　急がせあゆめ
よみの山路

と詠みし主人も、二十九年十月五日に清子の後を追って逝きました。後には女子二人、清子が日赤に入社後できた男子二人。主人の死後小さい四人の子供をかかえて、筆や口ではあらわせない苦勞をしました。

その時分です。ほかの人には恩給があるのに、私にはありません。私にすれば、明日の十万より今日の一万円がほしいと思いました。いろいろな人にたのみ、しらべてもらいました。県の世話部の人は、「貴方の所は軍属故、六十才になればもらえる。ただし、貴方の子供がもし不具者なれば今でも恩給はやります」と言いました。その時私は言いました。子供が不具者なればやる、あまりな言いかたです。私はいりません、と言いました。主人は五十六才で死んだため一銭ももらえず、もしや私が六十才にならずに死んだら、清子は犬死にですね、と申しましたら、その人は、「あんたは、お金がほしくて子供を戦地へやったのか」と言いました。あまりな言葉に、くやしくて口もきけないほどでした。

かわいそうに、女の身で、自分からすすんで求めた道とはいえ、さぞつらかったであろう。男とちがい、女にはメンスなど、男とちがったなやみもあり、物のとばしい山中での生活、女でなければわからないと思います。

日赤大阪支部へも、また元の日赤大阪支部の清子の上司林塩婦長にも、手紙で、あまりにも看護婦の待遇のわるさに、後につづく者のためにとお願い致しましたが、何の返事ありませんでした。

私自身も、「去るものは日々とうとし」とやら、そのくやささも幾分うすらぎました。何とし

ても、死んだ者はそんです。

言いたいこと、書きたいことは沢山ありますが、うまく書けません。ただただ、清子のめいふくを祈るのみです。

主人が愛しい子、清子に捧げた歌

女ながら意気たかだかと南方に骨をうずむと吾子の征出立つ

二十一年汝れいとしさに叱りぬきつよく育てし今日ぞかなしき

あまりにもつよく叱りしことのあり悔に時々我が胸いたむ

天かける魂の行方は万国よろずくに赤十字旗の下なおやまもらん

争いもいつわりも無き彼の世にて心静かに吾子の眠らん

清子の手紙や、子供を戦死させた者の悲しみが、少しでもお役に立てば幸いです。

今はただ、清子のめいふくを祈りながら。

山野たい

目次

二人の母親（遺族）から編者への手紙…………… 1

第一部 遺稿編

愛と死の谷間…………… 8

病院船のうた…………… 西沢都弥子 90

いとしき人へ…………… 諏訪 トシ 138

第二部 手記編

大陸の土を踏む……………	鈴木 妙子	185
撃 沈……………	江川 キク	220
ソ満国境を逃れて……………	長竹 文子	244
最後の島……………	楠 政子	266
私だけが生き残った……………	菅野 静子	286
悲劇を再びくりかえすまい……………	医療文芸集団	313

第一部 遺稿編

愛と死の谷間

石田尾正子

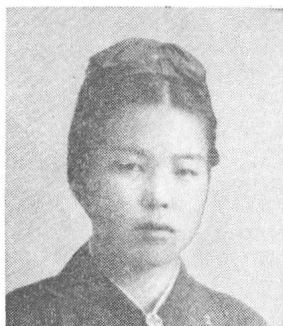
大正十五年七月生まれ。昭和十八年四月日赤中種看護婦生徒として台北赤十字病院看護婦養成所に入所。実務教習生として救護業務に従事。二十一年四月八日同病院にて粟粒性結核のため死亡。二十才。

〔台北の看護婦養成所にて 姉・敏子さん宛〕

お姉様 その後お変わりもなく、お元氣にてお勤めに忙しい日をお過ごしのことと思います。年も明けて、はや二月の終わりとなりました。二月と申しますと、内地で一番寒い月でございますが、今年の冬はいかがお暮らしのことでございますか。配給配給で、さぞかし不自由のことと思います。しかし、戦に勝つためには、どうしてもこの不自由をしのいでこそ初めて大東亜の平和はまいります。

正子たちも不自由、不自由と思いますが、その一面まだまだむだな点がたくさんございます。ことに病室におきましては衛生材料であります。一例をひろい上げますと、ガーゼの節約。今までは、ギプスに用いましたガーゼは捨てていましたが、今では熱いお湯につけて、ていねいにガーゼについているギプス粉を落として何回も洗い、再生として再び殺菌ガーゼとして患者に使用しております。これは正子たちの衛生材料中の仕事の一例としてのお話ですが、色々な方面におきまして、まだたくさんございます。物資減少のため研究心のわくことは、実にありがたい

石田尾正子さん



ことでございます。

戦はいつまで続くかわかりません。敵は、またもや我がマニラに盛んな爆撃をおこなっております。正子たちの三級上の上級生と、一級上の上級生の方がたは、今マニラに出征なさっていらっしゃいます。お話によりますと、とてもあぶないとのこと、婦長殿方とても御心配していらっしゃいます。一級上の上級生の方がたは飛行機にてマニラをたたれ、今お話によりますと、鹿児島島の桜島に来ていらっしゃるのことを聞いています。しっかりした話はわかりませんけど……。

この救護班には、内地から来ている方は誰もいらっしゃいません。もし自分たちの組が一年早かったら、故郷の土をふめることができますのに、とみんなで内地班が集まりましたら、空想でもえがいて、自分はお父さんを、お母さんを感じ、面会に来てもらうのだと大騒ぎです。

しかし、こうしてお話している時が正子たちの一番楽しいひと時であります。自分たちも早く一人前の救護員となって、国家に御奉公できる身体と精神力をつくらなければなりません。

卒業も後ひと月余りになりました。二年前の自分たちのことを思い出し、今ははや卒業を目前にひかえているだけであります。卒業後はいずくにまいるか、わかりません。

正子の身体は一人国家にささげた身体であります。どこに出征するかわかりませんが、けっして心配するようなことはございませんから、御安心くださいませ。

最後に、皆様方によろしく。お身体を大切に。

二月二十八日 夜

かしこ

正子 拝

姉 上様

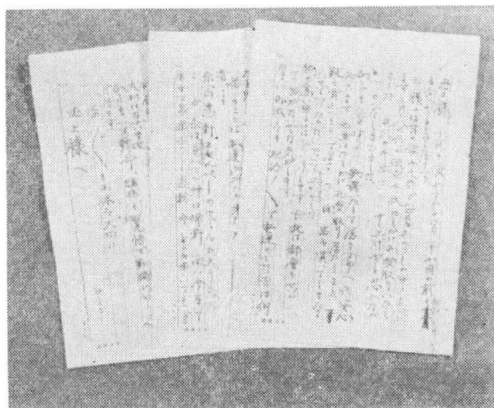
〔追記〕

小包のことを書くのを落としておりましたが、もし小包がお送りできましたら、モンペーと針糸、とても不自由していますからお送りくださいませ。モンペーは、警報が出ましたらすぐつけなくてはなりませんし、警報が続いていましたらそのまま着用して勤務いたしますので、家から送ってきた一枚とスカートでつくりました一枚ではどうしてもたりません故、すみませんがお送りくださいませ。

台北の町を描いた絵はがきでもありましたらお送りいたしたいのですが、夜勤で忙しくてなにもできない故、ごめんください。宵番（昼の一時から夜中の一時までの勤務）をしています。夜中の一時に帰りまして、昼の一時に出てまいります。休んでる間に自分の仕事を致しますが、寝る方が多くて、なにも致しません。

夕美ちゃんも今では元氣とのこと。ほんとうに病氣ほどつらいものはありません。正子も身体が少し悪くて休んだことがあります。病院にいますと、お薬も、飲むうと思いましたがいつでもいただけませんが、みんななかなか飲むうとしません。

しめ子ちゃんは、相変わらずの元氣でいることと思います。なかなか手紙くださいませ。姉上様方から、手紙くれるように申しといてくださいませ。奉仕奉仕でつかれて、手紙を書く元氣



もなくなることとは思いますが、手紙ほどなつかしくなさめになるものはございません。くれぐれも、しめちゃんに申し上げてくださいませ。

急に傷病兵内還がおこなわれるようになりましたから、名前の所に住所を書きません。

〔同じく 母・幸江さん宛〕

母上様 十一月も後わずかとなり、はや目の前に昭和二十年度を迎えようとしています。母上様にはその後お元気で毎日をお暮らしのことと思います。十月十八日付の航空手紙、たしかにお受け取り致しました。お礼の手紙さっそく差し上げようと思いながら、つつい延びてしまいました。正子も毎日はりきって勤務いたしております故、御安心くださいませ。

お金はたしかにお受け取り致しました。靴を買うつもりでいましたら、日用品を買ってしまいましたのでついたらなくなってしまう、止めました。物の高いことにはびっくりします。台北は都会のせいか、いっそう物がないうような気がします。たまに外出しても、配給配給で私たちのような者はなにも買えません。服地でも、石鹼、靴下、針糸、いっさい配給でありますから、私た

ちはなにも配給ございません。三、四カ月に一ぺん、石鹼の配給がございましたが、あると申しても顔石鹼の場合は四分ノ一で、ほんとうに三、四日つかったらなくなりそうであります。ほんとうに私たちにも、隣組のように、配給があったらよいものだと思います。台湾に家のある者はまだよいですが、一番困るのは、私たち内地から来た、たよりのない者です。

糸（白、黒）、針と、モンペーのきじをお送りくださいませんか。糸はできるだけたくさん、針は綿針、一ばん今こまっていますのが齒ぶらし、齒みがき粉。今、どこを歩いても、どこにもありません。二、三週間に一ぺん外出しますが、ほんとうになにも町にありません上に、なにを買えません。お菓子でも買いたしようと思っても、どこにもみあたりません。みんな配給配給であります。小包お送りくださいます時は、これだけの物を忘れずにならずお送りくださいませ。時局ますます重大な折から、母上様お身体を大切になさいませ。正子も、一生懸命がんばる覚悟で勤務にいそしんでいます。

くれぐれもお身体を大切に

母上様

かしこ

〔同じく 母・幸江さん宛〕

酷暑の季節となりました。その後母上様にはお変わりもなく、毎日お忙しい日々をお送りのことと思います。長い間お手紙差し上げず、失礼致しました。

正子が台湾にまいりましてより、はや一年四カ月余り。ほんとうに夢のように月日のたつのは

早いものであります。この間、時局はますます重大化し、私たちの勤めもいよいよましてまいりました。

正子たちの先輩も、卒業後どしどし南方に出征され、後に残ったのは、私たち二年生が最上級生として、この病院をせおって立っていますしだいであります。先輩の出征をお送り致します場合、私たちも早く一人前の救護看護婦となり、前線で傷ついた傷病兵の看護につとめたいと思います。

お話によりますと、南方向けは台湾班が一番適していることでもあります。正子たちも、出征するのなら南方にいくのだ、とみんなはりきってがんばっています。二年間になりましたから、後半年余りです。台北日赤病院も、北病棟の上下共に傷病兵の方がたがはいっていらっしやいます。一部分であります、全体となる頃は、本年中はかかるだろうと思います。

今年の五月頃からであります。正子は直接傷病兵の看護にはあたっていませんが、手術のさいには外科であります故、手術についたりいたします。外科にいますと、毎日手術におわれています。夜は、時どき臨時で起こされ、夜中にねむい目をこすりながら手術に出てまいります。初めの頃はなれないせいか、身体がきつくほんとうに困りましたが、この頃はすっかりなれて、なにごとも平気でやれます。盲腸手術後、いっそう元氣になったような気がします。病氣しますものも、自分の精神力でどうにでもなることが、はっきり自分の頭にわかりました。なにごとく精神力でやっていたら、負けるということはないだろうと思います。

母上様からの航空便、たしかにお受け取り致しました。正子も、きつときつと日赤看護婦とし